

並木先生との思い出

坂野明子

私が並木先生に初めてお目にかかったのは、かれこれ40年も前のことでした。博士課程に進み、アメリカ文学会東京支部の月例会に顔を出すようになった私は、その頃、研究者の卵としてウィリアム・フォークナーを読んでいた関係で、同じくフォークナー研究をされていた並木先生と例会終了後の飲み会で何回か親しくお話しさせていただいたのです。ただ、それからまもなく並木先生は秋田大学に着任され、私も静岡大学に就職しましたので、ほとんど接点もなく、十数年が経過しました。

90年代の始めの頃だと記憶していますが、静岡大学で教えていました時期にある方から「マラマッド協会を結成します、加わりませんか」という問い合わせがありました。私はその頃、研究対象をフォークナーからソール・ペローやバーナード・マラマッドなどのユダヤ系アメリカ作家にシフトしておりましたので、お誘いがあったのだと思います。第1回の集まりが青山学院大学でありまして、参上したところ、そちらに並木先生も参加メンバーの一人としていらしていました。その頃はすでに山梨大学に移られていて、引き続きフォークナーを中心にやっておられましたが、マラマッドについても論文を書いておられて、その関係で加わられたのでしょうか。

マラマッド協会というのは異色の学会でした。毎月のように例会があるだけでなく、年に3冊は本を出すという目標のもとに、皆で、次はどんなタイトルでどんな本を出すかを熱心に議論しました。アメリカ文学会全国大会が札幌であり、終了後、定山溪温泉に移動し、宿で夜遅くまで議論するなどということもありました。マラマッド協会のそのような精力的な活動の時期、

並木先生は中心メンバーの一人として、『アメリカ短編小説を読み直す』というタイトルの、新しい切り口のアメリカ文学短編論集の編集長を務められました。いろいろな個性の書き手だけでなく、協会の出版物に強いこだわりを持つ会長を相手にずいぶん苦勞をされたと聞いています。でも、並木先生のおかげで読み応えのある優れた本に仕上がりました。

マラマッド協会はその後、諸事情により活動を休止、後に解散するのですが、私と並木先生の関係は、専修大学文学部英語英米文学科の同僚になるという形で続くことになります。並木先生がいらした1998年当時、英文科は多数のベテラン教授陣と少数の若手教員というアンバランスな状況にあり、カリキュラム改革などを巡って難しい状況が続いていました。その中にちょうど中間的な年齢、そして経験は十分という並木先生が来られたわけで、学科が一気に活性化したことをよく覚えています。現在の学科の体制につながる改革でも先頭に立ってくださいました。

並木先生はアメリカ文学の研究者としてウィリアム・フォークナーだけでなく、ポー、ヘミングウェイ、カーゾン・マッカーズなど幅広く論考を發表されています。中でも日本フォークナー協会編纂の『フォークナー事典』の執筆および取りまとめにご尽力され、日本のフォークナー研究者にとって必携の書として結実することになりました。ただ、並木先生の素晴らしいところは、フォークナー研究の軸足はぶれることなく、もともと強い関心をお持ちだったキリスト教文化やファンタジーなどにも研究の対象を広げられたことです。2010年度の在外研究でも、アメリカではなく、フランスやイギリスに滞在され、教会建築やキリスト教関連の文化について見識を深められたと聞いています。

それはご担当の「キリスト教文化論」の授業に活かされただけでなく、東京ビッグサイトで行われている夢ナビでも披露され、高校生たちの関心を大いに引いたそうです。2017年度は『ゴシックで読み解く「千と千尋の神隠し」』というタイトルでお話をされたそうですが、座席数363の会場で3重の立ち見が出たとのこと、専修大学および文学部英語英米文学科の宣伝におおいに

貢献していただきました。

これまでのお話からもわかりますように、並木先生は好奇心が強く、行動派で、ご自分が興味を持った領域をとことん追求される方です。並木先生のご趣味の一つがカメラで、ときどきお撮りになった写真を見せていただきますが、被写体の魅力を引き出す技術に感心させられます。また、健康意識が高いことから来ているようですが、お料理に対する関心も高く、先日もお手製のスープをご馳走していただきました。だしの味がしっかりきいて、野菜がいろいろ入って、ほんとに文句なしの美味でした。だしについての講釈がひとくさりつきますが、それもだしの一部と思えば、誰をもハッピーにするお料理の腕だと思います。

そして、周囲を驚かせたのがボクシングへの傾倒です。何しろ、文学研究者とボクシングって、意外な組み合わせでしたし、ダンディーな並木先生とイメージが合わないように思ったのです。ところが、案に反して、大学のボクシング部の部長を長く務められ、合宿にも同行し、選手にいろいろアドバイスされているようで、熱の入れ方は半端ではありません。ご自身もジムに通われて、技術について学ばれたとも聞いています。好きなことにはとことんというご性格から考えると、納得できる気もいたします。

専修大学に移られてちょうど20年、ほんとにお世話になりました。また、楽しい時間も過ごさせていただきました。これからも研究も、趣味も、飽くことなく追求されることでしょう。折りにふれて、美味しいスープをご馳走になりながら、進行中のお仕事の成果や趣味の進展についてお話を聞かせていただけましたら幸いです。